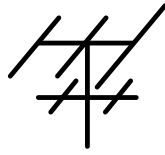


子育てチャンネル

いきいき・わくわく塾講師
三原 真琴
MAKOTO MIHARA



…ことを振り返ってみると、多くの人々との出会いがあった。各地でお話させてもらい、子育てや人生についての対話も多かった。その中で私はあるときから、そのときどきの問題についての考え方のベースを、こうつくるようになってきた。

頭の中で横に一本の線をイメージして、その両端に「野性化」と「家畜化」という語を置く。そして個々の問題について、このことは野性化、家畜化のどちらに寄り過ぎていくことなのかを基準として考えるようになった。

例えば、この半世紀日本の子育てでは、限りなく家畜化へ近寄ってきている。少なくともいまの団塊の世代以上の人々は、野性化に近い環境で育ってきた などである。

そして子育ては、本来野性の近くにある行為ではないかと思うようになった。集団的な野生動物の子育てには4つの大きな特性がみられる。

その1は、親が子に餌を直接与えることで親子のきずなが深まる。食を中心として生理的欲求が満たされている。

その2は、安心安全の欲求を親が保証。このことで将来子どもが集団の中に入っていける基礎がつけられる。

その3は、群れをつくれること。遊びなどを通して群れの一員にな

ることが出来る。他者を意識することで自己規律が形成される。

その4は、親ばなれの時期が必ず決まっていること。それで子は自立できるようになる。

以上は家畜にはないこと。人の手でひたすら食べて眠り、安全を得る代償に生命の輝きを奪われているのが家畜化である。

地べたに座り込む「家の中主義」の若者たち、学校給食、ブランドものを着る子どもたち、過大なお年玉、いまの子は限りなく家畜化に近寄り過ぎていくように思われる。

松尾つよし（教育評論家）妄言有特より抜粋

さて、皆さん、この一文をどう読みましたか。私共の時代をなつかしむつもりはありませんが、とにかく毎日が空腹の連続、頭の中は食べ物に対する想いで常に一杯。学校で授業を受けながら胸の中は放課後の遊びの計画や陣地作り、パチンコ作りの柳の枝のこと、これまたわくわく。

流水が浜一面に浮かんでいて、

底が青い海へ水の筏で漕ぎ出すときどき感（もちろん学校でも家で

もきつく禁止されてはいたのだ

が）も、勉強なんかどこへやら…。

毛布と百人一首の箱をかかえて

二・三人あっちの家、こっちの友

達の家へうつろ、どこかこの遊

びをやらせてくれる家探しの

だ。（たたみがすり切れる。ホコ

リがたつ、やかましいなどで心よく部屋を提供してくれる家はめつたにないのだ。わが家も含めて。親の留守の家はもっけのさいわい）かくしてホコリで鼻の穴を真っ黒にしてそれぞれの家へお帰り。

私達の少年のころは別に野性化の家畜化など特別に考えた訳ではありませんが、こんなことがごく普通にありました。もちろん、今の皆さん方は、家畜化なんて失礼な、それぞれの家庭でそれぞれに思うようにやっているのだから、とやかくいわれる必要なんかありません。

人間子育て考 （あなたはどちらに片寄って子育てをしていますか）

とおっしゃるでしょうが、どこかで「さて、わが家はどちらに近いのだろうか」と点検してみるのも一案かと思えます。自分で気付かないうちに一方に近づいてしまっているかもしれません。

ただ、この一文が非の打ちどころのない、真に正しい方向を指しているかどうかは読む皆さんの受け取り方ひとつなのです。

むしろ、こんな考え方や、こういうとらえ方があるのだという柔軟な受け止め方がよろしいのではと。

三原 真琴 みはらまこと
いきいき・わくわく塾講師
いきいき・わくわく塾
町教委・東子連主催で高齢者が子ども達に伝授する講座や、高齢者と子ども達が一緒に学ぶ講座が年間概ね7講座開催される。
講師には町内の芸術家や学識経験者などがあっている。

